

## Ⅲ—4 外国語

### 特定の課題に対する調査 教科等別結果の分析と考察

# 1 【系統性】の理解に基づく【連続性】を確保した調査企画の全体像

領域	指導事項(コミュニケーション活動例)	
ア 聞くこと	(ア)	強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取ること。
	(イ)	自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、情報を正確に聞き取ること。
	(ウ)	質問や依頼などを聞いて適切に応じること。
	(エ)	話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。
	(オ)	まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること。
イ 話すこと	(ア)	強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく発音すること。
	(イ)	自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。
	(ウ)	聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ合ったりなどすること。
	(エ)	つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。
	(オ)	与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。
ウ 読むこと	(ア)	文字や符号を識別し、正しく読むこと。
	(イ)	書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読すること。
	(ウ)	物語のあらすじや説明文の大切な部分などを正確に読み取ること。
	(エ)	伝言や手紙などの文章から書き手の意向を理解し、適切に応じること。
	(オ)	話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること。
エ 書くこと	(ア)	文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意して正しく書くこと。
	(イ)	語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。
	(ウ)	聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりなどすること。
	(エ)	身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと。
	(オ)	自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。

※S～C：設問レベル、【表】外国語表現の能力 【理】外国語理解の能力、  
【知】言語や文化についての知識・理解、番号：設問番号

中学校		
第1学年	第2学年	第3学年
※調査対象としない	出題範囲：小学校第5・6学年、中学校第1学年	出題範囲：中学校第2学年

	・C【理】【知】1-2	・C【理】【知】1-2
	・C【理】1-1-1 ・B【理】1-1-2 ・S【表】【理】1-5-2 ※領域複合エ(ウ)	
	・C【理】1-3-1 ・B【理】1-3-2	・C【理】【知】1-1-1 ・B【理】【知】1-1-2
	・C【理】【知】1-4-1	・B【理】【知】1-3
	・A【理】1-5-3	・B【理】1-4-2

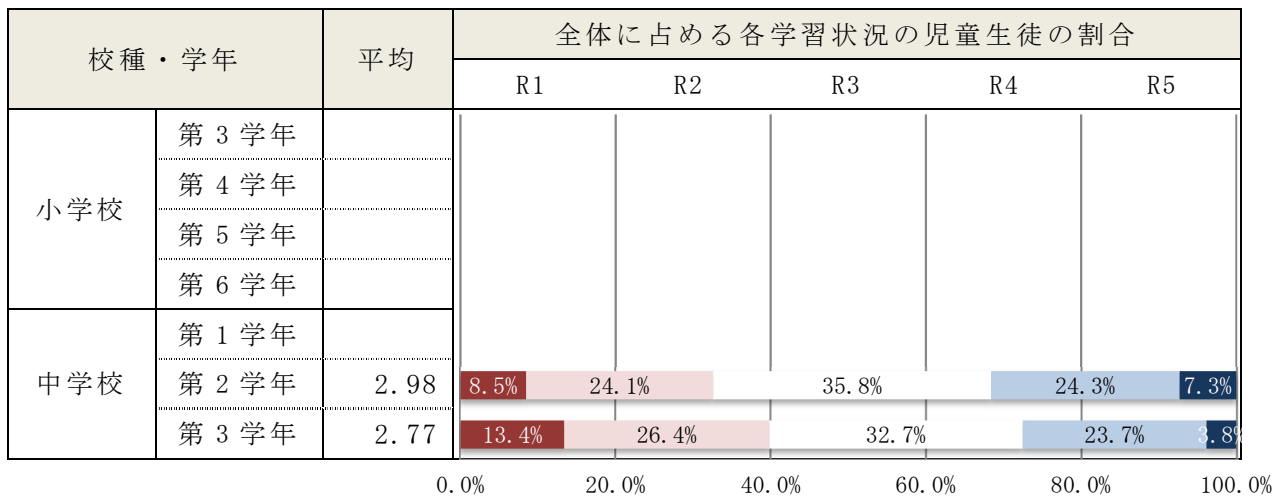
	・C【表】【知】2-1-1 ・B【表】【知】2-1-2	
	・B【表】【知】2-3-1 ・B【表】【知】2-3-2	・C【表】【知】2-1-1 ・C【表】【知】2-1-2 ・B【表】【知】2-1-3 ・B【表】2-2-1 ・B【表】2-2-2
	・C【表】【知】1-4-2	
		・A【理】4-5 ※領域複合ウ(オ)

	・B【理】3-1 ・B【理】3-2 ・A【理】3-3 ・B【理】4-1 ・A【理】4-2 ・B【理】4-3	・B【理】4-1 ・C【理】4-2 ・B【理】4-3-1 ・B【理】4-3-2 ・A【理】4-5 ※領域複合イ(オ) ・C【理】5-1 ・B【理】5-2 ・A【理】5-3-1 ・A【理】5-3-2 ・A【理】5-4 ・S【表】【理】5-5 ※領域複合エ(ウ)
	・A【表】【理】5-1 ※領域複合エ(エ)	・A【表】【理】3 ※領域複合エ(エ)
		・B【理】4-4

	・B【表】【知】2-2-1 ・B【表】【知】2-2-2	
	・S【理】1-5-1 ・S【表】【理】1-5-2 ※領域複合ア(イ)	・S【理】1-4-1 ・S【表】【理】5-5 ※領域複合ウ(ウ)
	・A【表】3-4 ・A【表】【理】5-1 ※領域複合ウ(エ)	・A【表】【理】3 ※領域複合ウ(エ)
	・S【表】5-2	・S【表】6

## 2 結果の分析と考察

### (1) 5段階の学習状況の評定(学力段階)(再掲)



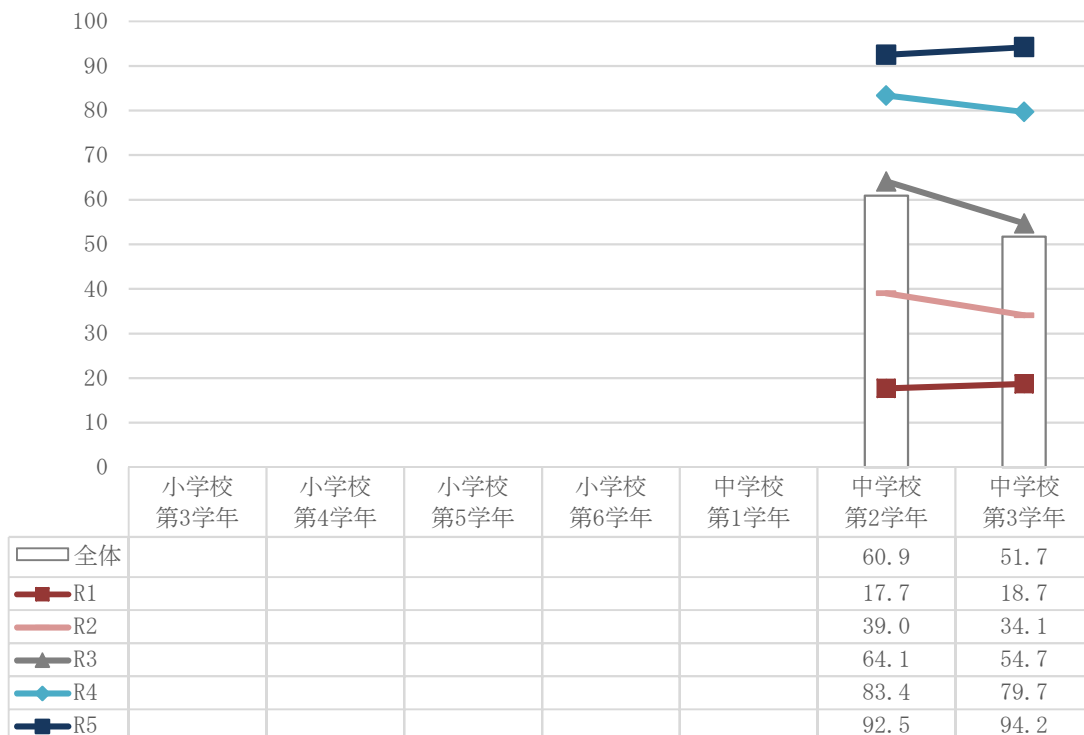
※学習指導要領に準拠した調査実施の前学年の学習状況の評定(学力段階)

R5 発展的な力が身に付いている      R4 十分定着がみられる

R3 おおむね定着がみられる(最低限の到達目標)

R2 特定の内容でつまずきがある      R1 学び残しが多い

### (2) 学習状況の評定(学力段階)ごとの平均正答率(教科等全体)(再掲)



## 〔学力段階に関する考察〕

- 「杉並区教育ビジョン 2012 推進計画」の目標 I に準拠すると、中学校第 3 学年における R3 以上の割合はおよそ 60% であり、令和 3 年度の目標値 80% からは 20 ポイント低い状況である。この状況を生徒数に換算すると、令和 3 年度目標値に至るためには、杉並区全体では 400 人（学年を 2,000 人とした場合）、1 校あたりではおおむね 17 人を R3（以上）に引き上げることが必要である。
- 学年の進行に伴い R1 が 4.9 ポイント、R2 が 2.3 ポイント増加しており、全段階での変化の度合いが最も大きいのは R1 の 4.9 ポイント増である。
- R2 は、主として基礎 B の設問を（おおむね）通過できなかった場合の評定である。基礎 B は 4 領域の全て、かつ外国語表現と理解の能力の両観点で出題しており、コミュニケーション活動における基礎的な知識や基本的な技能を出題内容としている。特に中学校第 1 学年を出題範囲とする第 2 学年の設問は、小学校外国語活動からの系統性と連続性を踏まえ、全設問に占める「聞くこと」「話すこと」の割合が高い。小学校が教科化を踏まえて充実しつつある今、小・中の接続に大きな課題がある。
- ◎（概括 1）R1・5 はほぼ固定である一方、中学校第 2 学年（第 1 学年の内容）の時点では「R3 おおむね定着がみられる」生徒が、学年進行に伴い「R2 特定の内容でつまずきがある」状況になる傾向があると考えられる。同時に「R4 十分定着がみられる」生徒が R3 に後退する傾向が顕著である。総体的に学年の進行に伴い一つ下位に評定される生徒が発生すると考えられる。

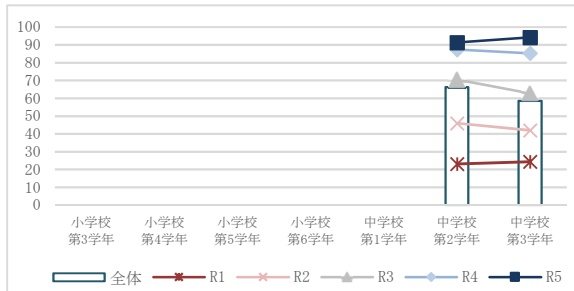
## 〔教科全体の学力段階ごとの平均正答率に関する考察〕

- 段階ごとの正答率は、R1・5 は学年の進行に伴って 1～1.7 ポイントの範囲で微増傾向がみられる一方、R2～4 では減少傾向である。
- 全体の正答率と R3 のそれとの差は、両学年とも R3 が高く、学年進行に伴い大きくなる。この背景には、上述した学年進行に伴う R2 の増加が要因としてある。
- ◎（概括）本年は、学びの構造転換「元年」として、外国語の取組は厳しい状況にある。小学校は 2 年間の、中学校は今年度での英語教育推進リーダーによる還元研修により、相互の系統性と連続性の理解・確保のための協働を通じて、特に音声から文字への円滑な接続の重要性を認識できたことは大きな収穫であった。しかし、それと同時に主体的・対話的で深い学びを目指す学びの構造転換の具体的手だてを模索する試行錯誤の日々が続いている。「自分で選ぶことから始まる学び」である個別探究に浸り、協同探究で主体性を深めながら多様性を育み、最終的に「既存の経験や知識と意味・価値あるよう関連付く学びである」深い学びに至る一連の過程の意味を理解し、どこで何をすべきか、何をすべきでないかを児童・生徒と教師が共に探究しながら歩みつつある。ともすると一回りして旧パラダイムに戻ってしまうことに気付き、愕然とすることも一度ならずである。一朝一夕では実現しないこの命題が目指すところは、自己決定の大切さと協同して生きる学びが、自由の相互承認という市民社会の基本原理を実質化するに不可欠であると自覚することで前進できると信ずる。

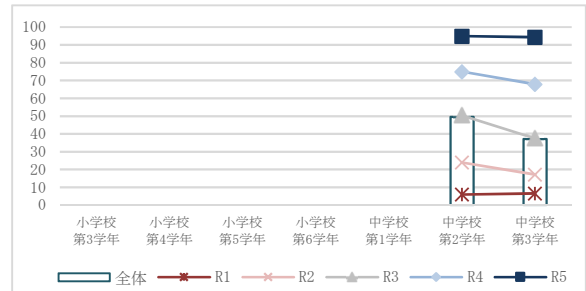
(3) 基礎・活用別、観点別、領域別の学力段階ごとの平均正答率

① 基礎・活用別

ア 基礎

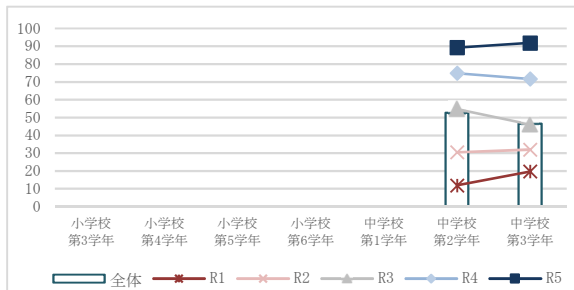


イ 活用

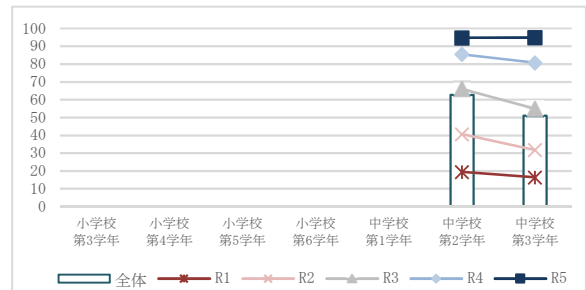


② 観点別

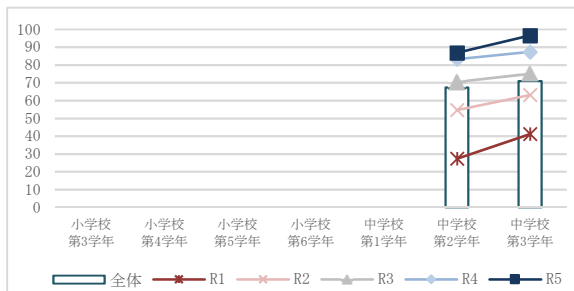
ア 外国語表現の能力



イ 外国語理解の能力

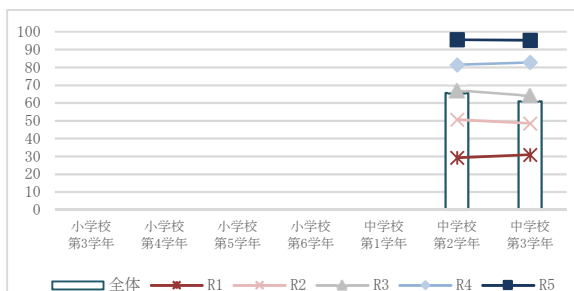


ウ 言語や文化についての知識・理解

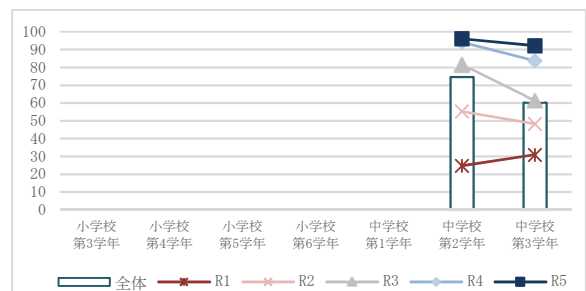


③ 領域別

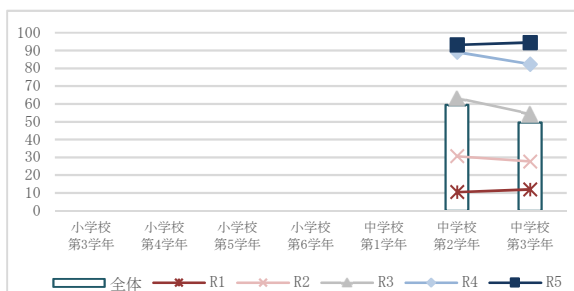
ア 聞くこと



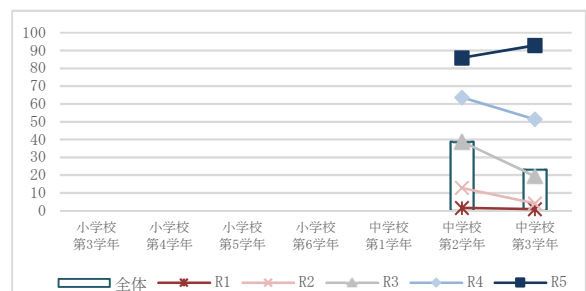
イ 話すこと



ウ 読むこと



エ 書くこと



## 〔基礎・活用別、観点別の考察〕

- 学年進行に伴う正答率の変化は、「基礎」「活用」ともに R2～4 に低下傾向がある。
- 段階別に見ると、学年進行に伴い、「活用」の R2・3 が下降の傾向がある。特に R3 の-13 ポイントが際立っている。

## 〔観点別の考察〕

- 「言語や文化についての知識・理解」は、R1 が学年進行に伴い-14 ポイントである。
- 「外国語表現の能力」は、R5・2・1 は上昇、R4・3 は下降傾向がある。
- 「外国語理解の能力」は、学年進行に伴い R4～1 で下降傾向がある。

## 〔領域別の考察〕

- 「聞くこと」は、R3・2 に学年進行に伴う下降傾向がみられる。
- 「話すこと」は、学年進行に伴い R1 以外の全段階で正答率の下降傾向がみられる。後述(4)イ①「会話の継続」②「問答・意見を述べ合う」に関する設問によれば、全レベルで通過率の低下がみられている。
- 「読むこと」は、学年進行に伴い R4～2 は下降傾向がみられ、ただしこの傾向は、「読むこと」の設問が全体に占める割合が、第2学年の28%（7問）と比較し、第3学年で52%（13問）に上昇することの影響もあると推察される。
- 「書くこと」は、R5を除き、学年進行に伴う正答率の低下が他領域と比較し顕著である。後述(4)エを参照すると、複数技能を統合するメモ(①)ではR5を除く全ての段階、つながりのある文章(②)では全ての段階で通過率の低下が著しい。

◎（概括1）上記は、正答率を主たる材料にした考察であり、また、同個体の経年変化に基づくものではないことを主たる理由とし、正答率の微細な変化や差をもって、学年進行に伴う傾向や観点・領域間を比較した傾向を同定することは避けるべきである。以下は、これらのことを前提としてもなお、解決する必要のある課題である。

◎（概括2）「外国語表現の能力」「言語についての知識・理解」は、R1・2 に学年進行に伴う状況の改善がみられる。しかし、「外国語理解の能力」については、R5を除く全ての段階でつまずきや学び残しがそのままになっている可能性がある。

◎（概括3）近年、領域別の指導に加えて、言語使用の実態からも4領域の統合的活動に配慮することが重視されてきた。さらに、小学校において次年度から全面実施の新学習指導要領では、話すことの領域を①やり取り：即興で伝え合う、考えなどを伝えたり質問に答えたりすることと②発表：まとまりのある内容を話すことに分けている。どちらも即時性と話題の内容に沿った対応が求められている。

しかし、これらは、以前から中学校においても大きな課題であり続けたことから、改めてもう一度コミュニケーションに関しての基本的な認識を問い直す必要がある。

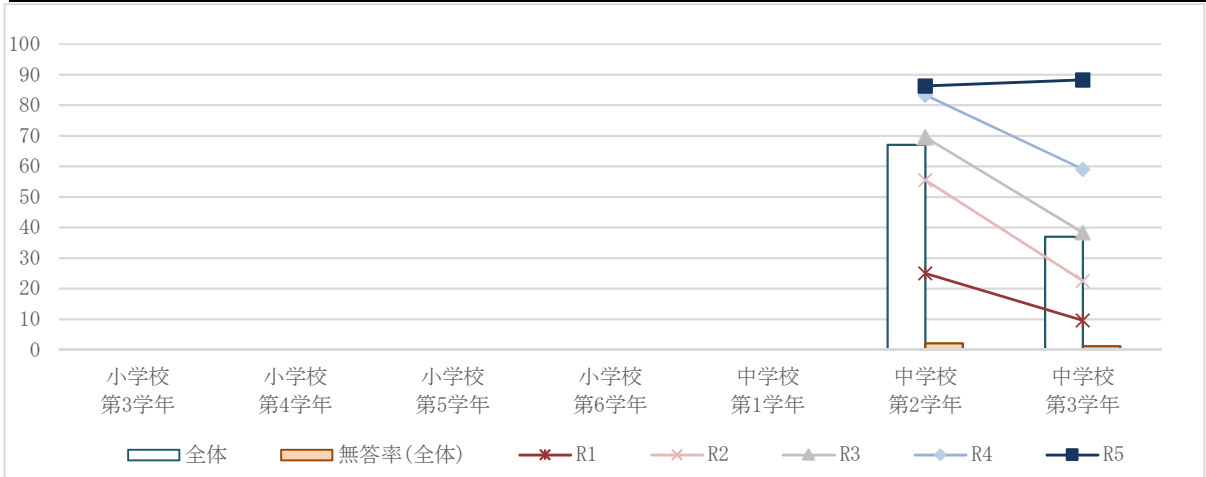
「コミュニケーションの本意は、伝えたいと思う熱意と理解しようとする優しさにある」。これは、ある中学生がたった2週間の海外留学で学び取ったことである。

(4) 領域別に抽出した設問の(準)通過率・無答率

ア 聞くこと

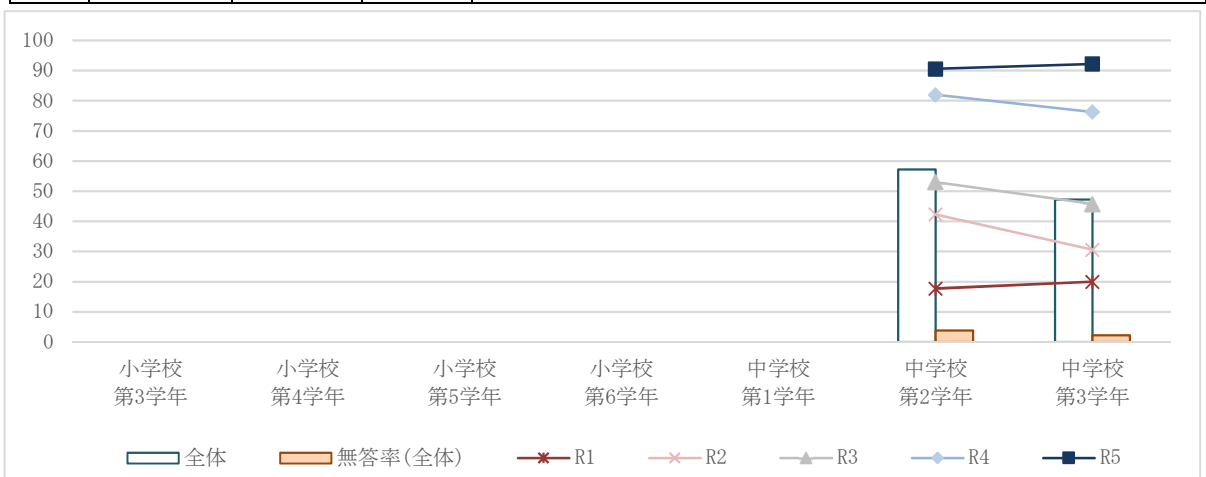
① 「強勢・イントネーション」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容【観点】
小学校	第3学年			
	第4学年			
	第5学年			
	第6学年			
中学校	第1学年			
	第2学年	C	1-2	(ア) 対話の内容から強勢を正しく判断する。【知】【理】
	第3学年	C	1-2	対話の内容から強勢を正しく判断する。【知】【理】



② 「概要・要点の聞き取り」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容【観点】
小学校	第3学年			
	第4学年			
	第5学年			
	第6学年			
中学校	第1学年			
	第2学年	A	1-5-3	(オ) 概要や要点を適切に聞き取る。【理】
	第3学年	B	1-4-2	概要や要点を適切に聞き取る。【理】





## 〔「強勢・イントネーション等を正しく聞き取ること」に関する設問の考察〕

第 2・3 学年ともに、対話の内容から正しい強勢を判断することを趣旨とし、設問レベルはともに基礎 C である。全体の通過率は第 2 学年が 67.0%、第 3 学年が 37.0% であり、第 2 学年の R3 から 1 はそれぞれ 69.6%、55.5%、25.0%、第 3 学年は 38.3%、22.5%、9.6% である。第 2 学年は R2 と 1 の間に、第 3 学年は R4 と 5 の間にも約 30% の隔たりがみられた。単純な英問英答にもかかわらず毎年この設問の通過率は低い。設問が一度しか読まれないことと、聴覚からの認知を書かれた設問を読み取って答える視覚の認知へと転換させる解答方法ゆえに、難易度が高くなったと考えられる。感情や状況判断に由来する強勢、イントネーションを意識した音読やコミュニケーション活動が十分行われていないことが推察される。

学校という閉じられた空間で学ぶ際には、将来生徒が体験するであろう様々な具体的な課題を設定し、その課題解決に向けて行われるコミュニケーションの目的や場面、状況などを生徒に意識させることが重要である。そのためには、定型的なやり取りのみで終始せず、相互に相手の意図するメッセージを理解して応える真のコミュニケーションとなるよう努める必要がある。換言すれば、問う者は自らの意志と目的をもって問い、問われた者は相手の真の意図を汲んだ上で求められた目的に沿った対応をする、日常的な言語使用の原点に改めて立ち返る必要がある。

## 〔「概要や要点を聞き取ること」に関する設問の考察〕

第 2・3 学年ともに、スピーチを聞いて、要点を適切に聞き取ることを趣旨とする。設問レベルは第 2 学年で活用 A、第 3 学年は基礎 B である。全体の通過率は第 2 学年 57.2%、第 3 学年 47.2% であり、第 2 学年の R3 から 1 の通過率が 53.0%、42.3%、17.7%、第 3 学年は 45.8%、30.6%、20.0% となり、昨年より低下している。一方、R5 は昨年より数% の上昇がみられ、R3、2、1 との差が広がっている。

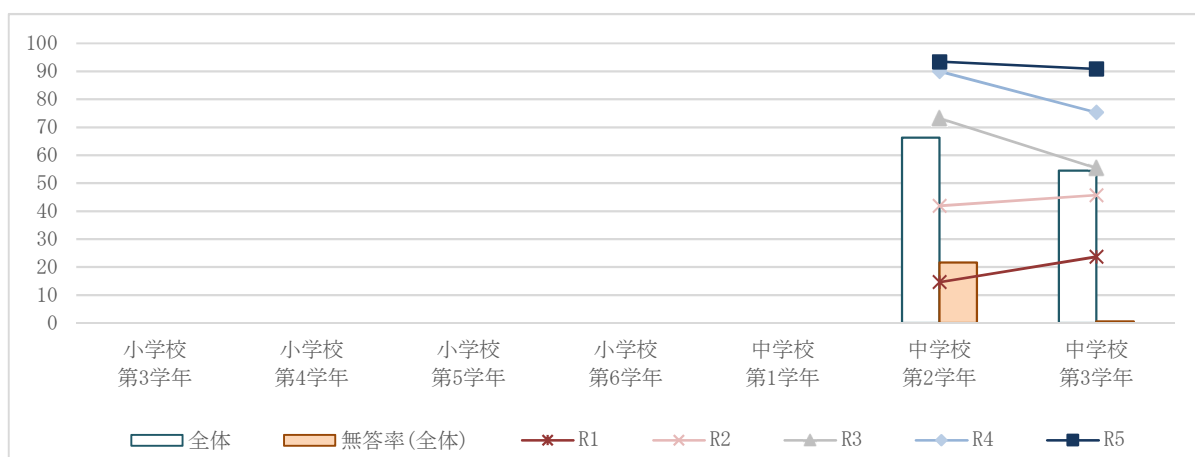
まとまった文を聞いた後、長めの疑問文を聞いて解答しなければならないこの設問では、全体の概要をつかむ力のほか、多くの情報から必要な情報だけを選ぶ力、メモを取る力が必要である。そのためには、まとまった文章を聞き、キーワードを捉え、自らの力で要約し、英語で再発信する活動を繰り返し取り入れる必要がある。

学びの構造転換につながるリスニング能力の育成のためには、個々の生徒の音声情報を活用する能力としての音声の知覚、その音声の伝える意味を理解するための多様な言語理解能力の分析が不可欠である。さらに、聞く活動の段階や教材のジャンルを複数準備し、生徒が自分の興味・関心、能力に応じて選択できる個別化が必要である。回数、速度、設問の量、難易度等を各々の段階に合わせて選択でき、かつ、個人、ペア、グループ等の形態で、ICT やタブレット端末等を使って学びの個別化や自由選択を図る。リスニング材料、内容に関しても、ALT に協力を仰ぐのはもとより、教師自らが広く世界に目を向けて、より生徒の興味関心の高い内容についてオリジナリティあふれる教材・学習材を使用することで、リスニング力の向上を図る。

## イ 話すこと

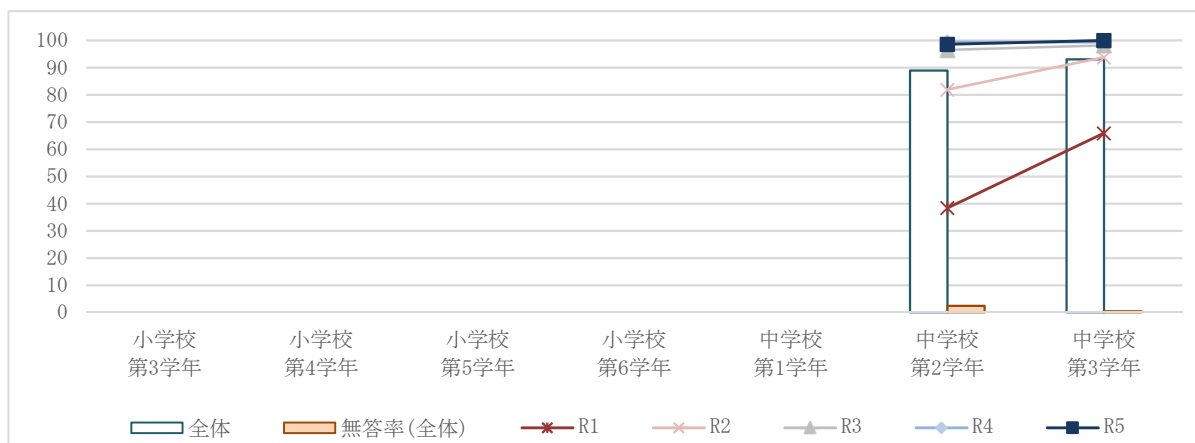
### ① 「会話の継続」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨
小学校	第3学年			
	第4学年			
	第5学年			
	第6学年			
中学校	第1学年			
	第2学年	B	2-3-1	(ウ) 話題をつなぐ応答をする。【表】【知】
	第3学年	C	2-1-2	(ウ) 話題をつなぐ応答をする。【表】【知】



### ② 「問答・意見を述べ合う」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨
小学校	第3学年			
	第4学年			
	第5学年			
	第6学年			
中学校	第1学年			
	第2学年	B	2-1-2	(イ) 自分の考えや気持ちを正しく伝える。【表】【知】
	第3学年	C	2-1-1	(ウ) 問答したり意見を述べ合ったりする。【表】【知】



### 〔「会話の継続」に関する設問の考察〕

本設問の出題趣旨は会話の継続である。第2学年の設問レベルは基礎Bで発言の繰り返しを求める言い方を記述する設問、第3学年の設問レベルは基礎Cで様々な相づちの表現の中から相手の予定に関心を示す表現を選択する設問である。

第2学年の全体通過率は66.3%、聞き返しの表現を放送された4文から選択する設問では93.2%であることから、“Pardon?”という表現は認識できている。他方、現実に自らの言葉として使えていない実態が推察できる。第3学年の全体通過率は54.5%であり、無答率が0.6%の選択形式にもかかわらず通過率が半数強にとどまった。生徒の意識・実態調査で、聞き返しの言葉などを使うことの肯定率が両学年とも80%近いものの、場面や状況に応じた対応ができていない様子が考えられる。

学んだ知識を、実際の対話の中で使えるようにするためには、One Minute Chatのような日常的なSmall Talk等が有効である。しかし、相手の発言の内容にのみ注目すればよい段階（第一段階）から、内容と言語形式の両方に注目して反応をする必要がある段階（第二段階）に進むと、つまずきの解消にはコミュニケーションの中で文法や音声、語彙等に注目を向けさせるFocus-on-Formの指導にシフトすることも必要となる。ただし、意図的な取り組みと同時に、日常の学習や多様な学習材の整備された環境、さらには生徒自らが必要と考える状況の中で、教師と生徒が必然性のあるコミュニケーションをした時にこそ真の会話の継続が実現され得ると考える。

### 〔「考え・気持ちを伝える」に関する設問の考察〕

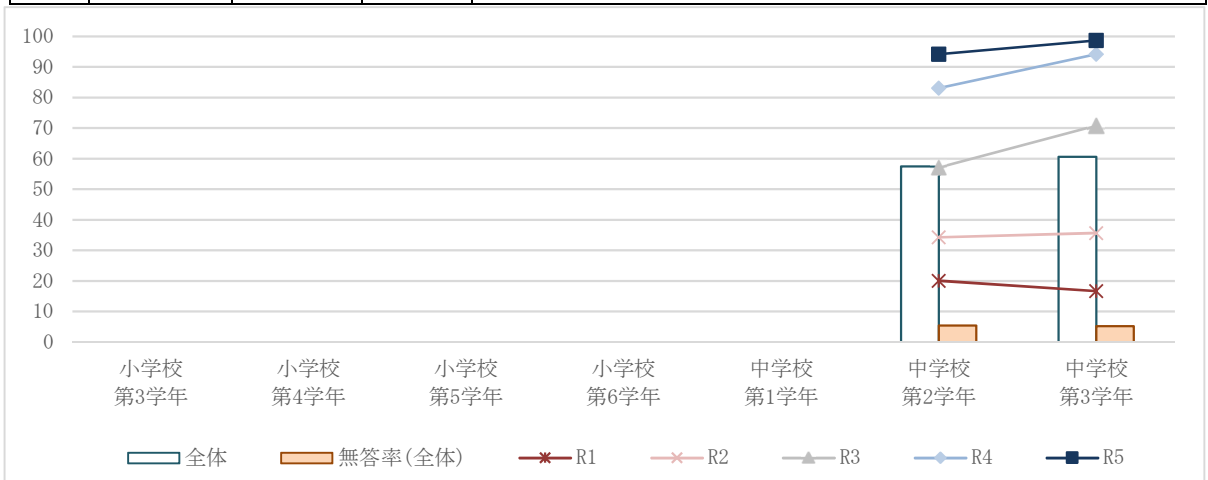
本設問は、対話の流れに沿った話者の考えや気持ちを伝えることを趣旨としている。第2学年の設問レベルは基礎Bで、「人物の評価に関する話者の考え」を選択する設問、第3学年の設問レベルは基礎Cで「相手の話している内容に対する話者の感想」を選択する設問である。第2学年の全体通過率は88.9%であり、R5から2の正答率が80%を超えるのに対し、R1は4割弱と差が開いた。第3学年の全体の通過率は93.0%となり、全設問中で最も高い。R5～2の正答率が90%を超えており、R1でも60%を超えている。若干設問の改訂こそあるものの、通過率の経年変化をみると向上傾向が確認でき、短い文で自分の考えや気持ちを伝える活動が定着してきていると考えられる。一方、意識・実態調査の結果を見ると、まとまった文に対して自分の意見を述べるなど、より複雑な表現に対する肯定率は両学年とも65%強であり、英語に関する質問の平均肯定率を下回る。

今後、更に深く自分の意見を伝える力を伸ばすには、インプットとアウトプットの適度な比率（二者の量は10:1程度がよいと言われている）に配慮することが必要である。そして、「ぜひ伝えたい」という気持ちを生かすには、教師側の都合だけで言語と内容が繋がりのない機械的なドリルに終始するのではなく、生徒自らがゴールを設定し、伝えたいと思える意味のある(meaningful)題材や身近にある多様な学習方法も選び、浸りかつ協同する過程を教師が共に沿いながら待ちたい。

ウ 読むこと

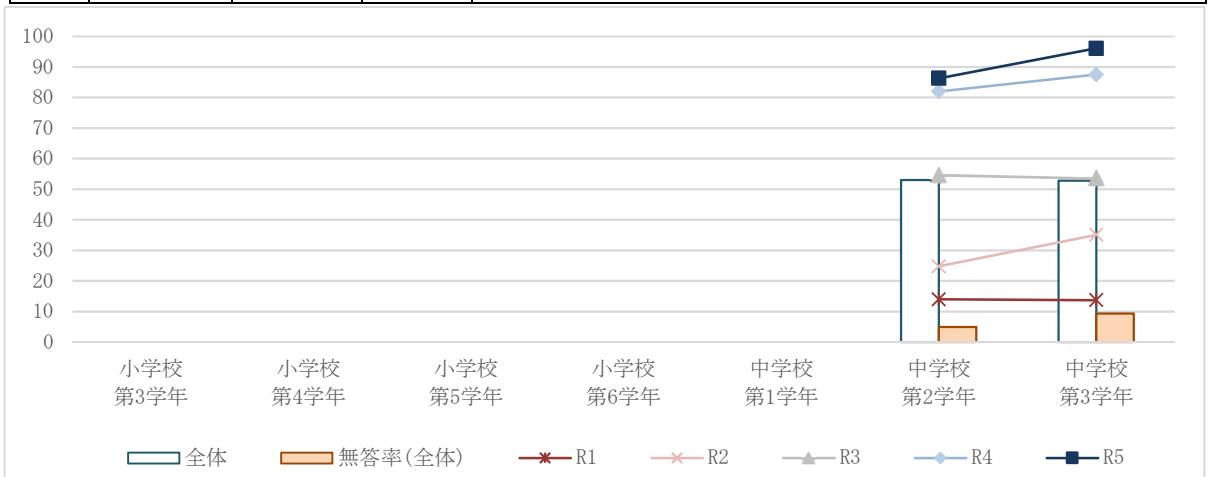
① 「正確に読み取る」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨
小学校	第3学年			
	第4学年			
	第5学年			
	第6学年			
中学校	第1学年			
	第2学年	B	3-2	(ウ) 金額を正確に読み取る。【理】
	第3学年	A	4-5	映画のタイトルを正確に読み取る。【理】



② 「意向を理解し応じる」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨
小学校	第3学年			
	第4学年			
	第5学年			
	第6学年			
中学校	第1学年			
	第2学年	B	4-3	(エ) メールに対する返事を書く。【理】【表】
	第3学年	A	5-3-2	文化の違いに対する助言を書く。【理】【表】



### 〔「正確に読み取る」に関する設問の考察〕

本設問は、書かれた内容のあらすじや大切な部分などを正確に読み取ることが趣旨として出題している。両学年とも、設問レベルは基礎 B、設問形式は 4 択である。第 2 学年では、英文を読み、対話の流れから指示代名詞 that が何を意味しているのかを読み取る設問であり、第 3 学年は、ユウヤとスーザンがどの映画を観ることになるのか、会話のやりとりの結果を正しく理解し選択する設問となっている。

各学年の全体通過率は、第 2 学年が 57.5%、第 3 学年が 52.6%であり、段階別に見る各学年の特徴は、第 3 学年の R4・5 の通過率は第 2 学年を上回っているにもかかわらず、R1・2 は逆である。また、第 3 学年の R1 においては、正答率が 15.9%であり、ほぼ理解していない状態で読み進めている状態であることがみて取れる。

これらの設問が基礎 B であることから、単語と文法力の欠如や読むことに関する活動の不足が課題であることは言うまでもない。注目すべきは、各生徒が各々に異なる課題をもっていることである。ゆえに、生徒自らが自分に合った学び方を選んで課題把握をし、教師はそれを支援し共に歩む。そのためには、個々のカルテを生徒と教師が共有しつつ、週 1 回は 20 分間程度を興味のある分野の読み物を自由に選んで読める時間にしたり、友達と内容について話し合ったりするような活動を中心に統合的な活動ができる時間設定をするなど、1 パート 1 時間の展開でなく、レッスン単位や学期別等の多様なデザインを展開する発想も必須となる。

### 〔「情報を正確に読み取る」に関する設問の考察〕

本設問は、情報を正確に読み取ることが出題趣旨としている。第 2 学年は基礎 B で対話の展開を大まかに把握する力、第 3 学年は活用 A で留学に関して 5 人の生徒が意見を述べる中、求められる内容の意見の人物を特定する設定になっている。結果は上記と酷似しており、設問レベルが変わっても正答率にはほぼ変化はない。

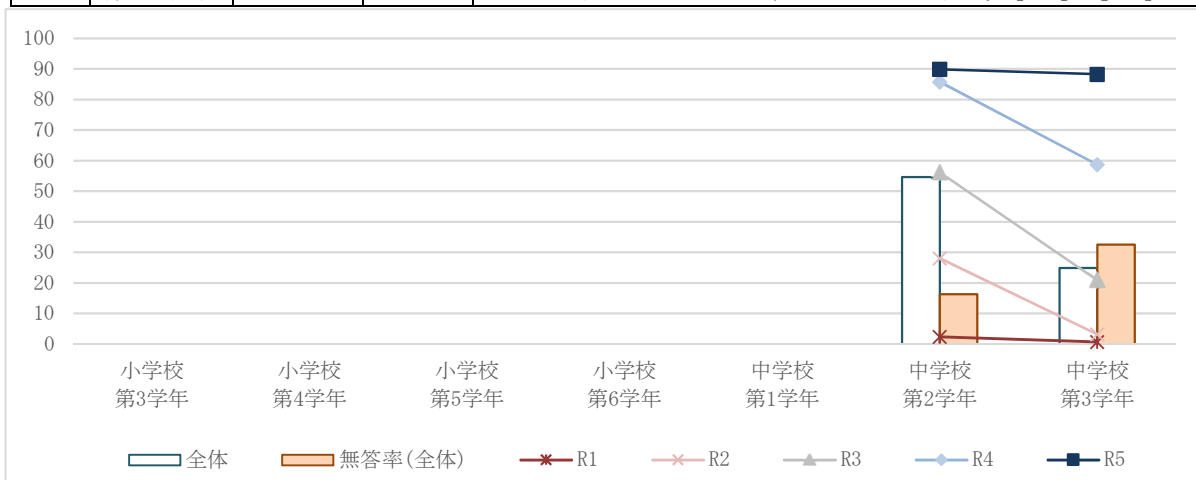
その対策は、上記のようにカルテを活用して個に応じた課題解決を図るとともに、他方では、先人の知恵である第二言語習得理論や応用言語学の一端を取り入れることで、一個人の思い込みと経験の範囲にとどまる試行錯誤を回避することも必要である。複数の文を全て個別に分解して理解しても、fact-finding 的な答えは見付かるかもしれないがその先にはたどり着けない。

読むことについては、次のような方法がある。全体の内容を大まかに把握する Skimming と、素早く読んで必要な情報を抜き取る Scanning である。前者はキーワードを拾いながら大意を把握をし、後者は探している情報を中心にそれ以外は読みとばすなど、読む目的に応じて使い分ける。そのためには、前段階の音読・黙読時にはスラッシュリーディング、まとまったストーリー等の場合にはパラグラフリーディングや英文の文構造の知識、そして未知語を推察しながら読み続ける力を必要に応じて使い分ける必要がある。これらの方法を通して、学習者が相手意識をもったコミュニケーションを継続した時に、初めて真の目的に応じた読みができる。

## エ 書くこと

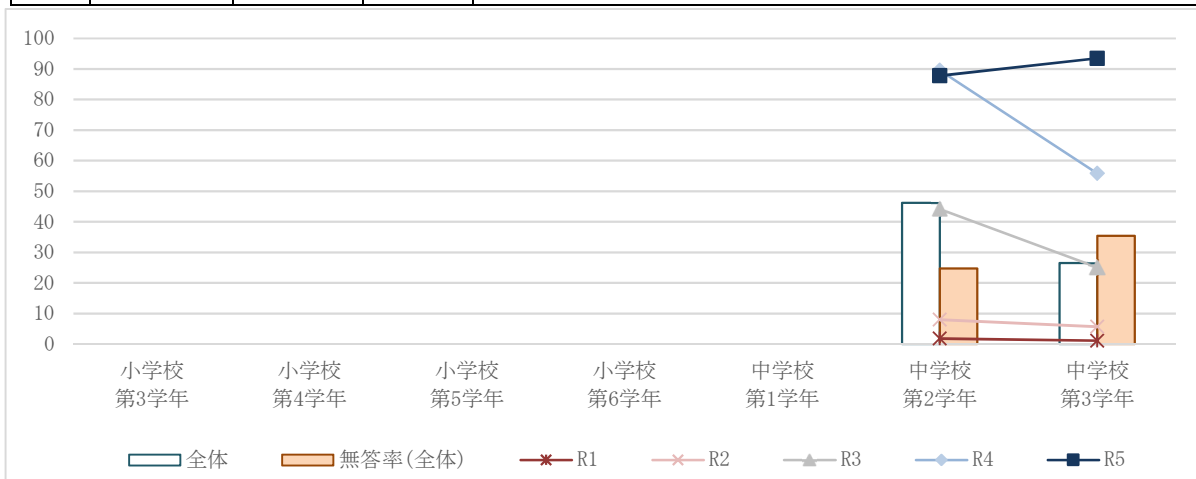
### ① 「自分の考えを書くこと」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨
小学校	第3学年			
	第4学年			
	第5学年			
	第6学年			
中学校	第1学年			
	第2学年	A	3-4	(エ) 話題に対する自分の考えを書く。【表】
	第3学年	A	3	書き手の意向を理解しアドバイスを書く。【表】 【理】



### ② 「正確に読み取り感想等を書く」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨
小学校	第3学年			
	第4学年			
	第5学年			
	第6学年			
中学校	第1学年			
	第2学年	A	5-1	(エ) メールに対して適切に返事を書く。【表】 【理】
	第3学年	S	5-5	(ウ) 意見を読み取り、賛否・理由を書く。【表】 【理】



## 〔「自分の考え等を書くこと」に関する設問の考察〕

本設問は、話題に対する自分の考えを理由を付けて述べることを趣旨として出題している。設問レベルは両学年とも活用 A である。第 2 学年はフードフェスティバルに関する英文を読んだ後、「フードフェスティバルが好きか」という問いに対し、理由を含めた自分の考えを 2 文の英文で書く。第 3 学年は ALT からの相談に対し、アドバイスを書く設問である。第 2 学年全体の通過率は 54.6% である。その内訳を学力段階別に見ると、第 2 学年では R5 と 4 では 4.1% の差があるのに対し、R4 と 3 では 29.6%、R3 と 2 では 28.1%、R2 と 1 では 25.7% と大きな開きがある。第 3 学年全体の通過率は 24.9% である。R4 と 5 の間には 29.6% の差がある。R3 は 20.9%、R2、R1 は 4% に満たなかった。今年度も領域別正答率をみると、4 領域の中で書くことが最も課題がある領域であり、また、次の課題である読むことと比較すれば、第 2 学年が 38.8% で -20.6%、第 3 学年が 23.1% で -26.5% となっている。

この背景には、日常的に単純な英語でのやりとりしか経験がないことに最大の原因がある。相手の質問に対して自分の答える内容に更なる情報を加えて発信し、継続的にやりとりを行っていくこと、また、相手の考えを知るために必要な情報を引き出し、相手の意見を取り入れるなどして次の対応の発展に生かすことも重要である。教科書の題材には、登場人物が書いたメール文や悩み事の相談などがある。それらの内容を理解するだけでなく、メールの返事を書く、悩みに対する自分なりのアドバイスを書くなどの活動を取り入れる。書く力を育む何よりの原動力は、一領域に限定せず、同レベルの内容の複数領域の統合された活動を経て、自分が是が非でも伝えたい情報、考えたことや感じたこと等を発信し、相手からの反応や異なる意見などを受け取るような、実生活に直結する伝えることの喜びや期待である。

## 〔「正確に読み取り、感想・理由等を書くこと」に関する設問の考察〕

本設問は、人物の意見を正確に読み取ること、また、その賛否と理由を含む自分の意見を文章で書くことを趣旨とする。出題レベルはいずれも活用 S である。第 2 学年では、メールの内容を理解し、適切に返事を書く設問、第 3 学年では、海外留学をした日本の高校生と、海外から日本に留学してきた高校生の対話文を読んだ上で、アイの意見に賛同するか否かを理由も添えて 10 語以上の英文で書く設問である。本設問の全体の通過率は、第 2 学年は 64.8%、第 3 学年では 26.5% にとどまった。

書くことの能力を伸ばすために、幾つかの効果的な方法が次のように報告されている。ア 間違いなどを気にせず、日記やレポートなど書きたいことをある程度多量に書き続ける。イ 姉妹校などの相手に手紙やメールなど書く必然性と緊張感をもって定期的にやり取りをする。ウ 「8 行だより」と名付けた班日誌の英語版を週 1 回ずつまわす。エ SNS 等で海外ニュースの自分の興味のある話題にコメントを送る。オ 海外漫画や映画のスク립トを参考にして、簡単な絵にストーリーを付ける。これらを参考にしてできるところから取り組み、互いの成果を学び合う必要がある。

# 3 各学年の結果と分析、考察と改善策

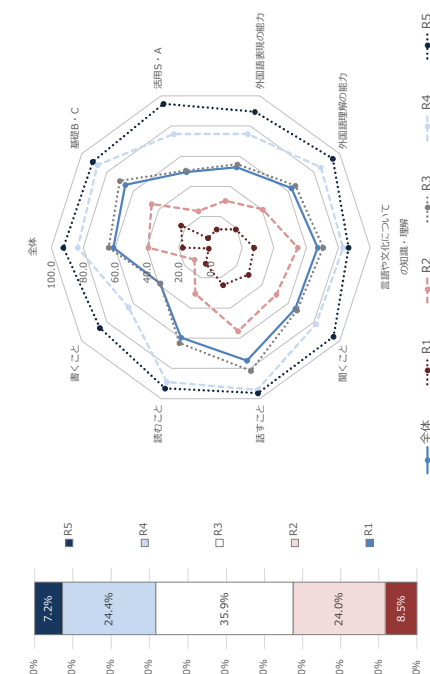
## 中学校第2学年

設問番号	出題		学習状況の観点										結果													
	形式	内容	設問レベル	1	2	3	4	5	A	B	C	D	E	得点率(%)												
1	選択	動物に関する情報を正確に読み取る	基礎B	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	97.7	82.9	98.3	98.7	100.0	100.0	0.6	6.1	0.2	0.0	0.0	0.0	
2	選択	動物に関する情報を正確に読み取る	基礎B	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	59.0	25.0	34.8	59.4	83.7	93.5	0.7	6.7	0.4	0.1	0.0	0.0	0.0
3	選択	対話の内容から話し言葉を読み取る	基礎B	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	67.0	25.0	55.5	69.6	83.3	86.3	2.1	12.2	2.6	1.2	0.2	0.0	0.0
4	選択	所有者に関する事項に適切に反応する	基礎C	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	65.1	10.4	34.8	71.9	98.1	98.6	2.3	17.7	1.7	1.2	0.0	0.0	0.0
5	選択	学校に関する事項に適切に反応する	基礎B	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	68.6	15.9	45.1	74.6	93.0	95.7	2.2	16.5	1.3	0.9	0.6	0.0	0.0
6	選択	取組の内容を把握する	基礎C	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	93.2	57.9	91.4	97.0	99.6	100.0	1.1	12.2	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0
7	選択	取組の内容を把握する	基礎C	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	92.7	55.5	90.1	97.4	99.2	100.0	1.1	11.6	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0
8	記法	聞いたことについてメモをとる	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	64.8	3.7	30.5	76.4	92.4	100.0	10.2	59.8	19.0	1.6	0.0	0.0	0.0
9	記法	スピーチの内容を正確に読み取る	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	16.8	0.0	3.7	13.0	16.7	100.0	30.6	87.2	56.4	22.8	6.4	0.0	0.0
10	記法	スピーチの内容を正確に読み取る	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	57.2	17.7	42.3	53.0	82.0	90.6	3.8	28.7	4.3	0.9	0.2	0.0	0.0
11	記法	スピーチの内容を正確に読み取る	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	74.7	14.0	51.2	84.9	96.8	99.3	2.5	20.7	2.6	0.3	0.0	0.0	0.0
12	記法	スピーチの内容を正確に読み取る	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	88.9	38.4	81.9	96.5	99.4	98.6	2.4	23.2	1.7	0.1	0.0	0.0	0.0
13	記法	人と物の関係に関する情報を正確に読み取る	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	26.7	0.6	4.8	23.6	51.5	61.9	4.1	35.4	3.9	0.4	0.0	0.0	0.0
14	記法	人と物の関係に関する情報を正確に読み取る	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	28.4	0.6	8.0	24.6	53.6	61.9	7.4	41.5	13.4	2.7	0.6	0.0	0.0
15	記法	人と物の関係に関する情報を正確に読み取る	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	66.3	14.6	41.9	73.2	90.0	93.5	21.6	72.0	38.4	14.1	4.7	1.4	0.0
16	記法	取組の内容を把握(読み取り)、物事の条件・状況下における側面に答える	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	50.3	1.2	11.4	55.9	85.8	89.2	24.7	79.3	47.5	16.4	2.5	0.7	0.0
17	記法	依頼を正確に読み取る	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	67.9	6.7	34.3	60.3	96.3	96.4	6.2	40.2	10.2	1.0	0.0	0.0	0.0
18	記法	指示語が意味する内容を正確に読み取る	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	57.5	20.1	34.3	57.1	83.1	94.2	5.4	36.0	8.0	1.2	0.2	0.0	0.0
19	記法	人物が言ったことを読み取る	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	56.8	4.3	28.5	60.4	86.7	93.5	19.8	73.2	40.0	10.8	0.6	0.0	0.0
20	記法	読者に對する自分の考えを書く	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	54.6	2.4	28.1	56.2	85.8	89.9	16.3	76.8	30.5	6.5	0.6	0.0	0.0
21	記法	人物の行動に関する情報を正確に読み取る	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	69.6	10.4	39.7	80.0	96.0	97.1	7.3	45.7	10.4	2.2	0.6	0.0	0.0
22	記法	人物の行動に関する情報を正確に読み取る	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	65.1	16.5	44.5	66.3	90.9	97.1	3.8	27.4	5.2	0.6	0.0	0.0	0.0
23	記法	人物の行動に関する情報を正確に読み取る	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	53.0	14.0	24.8	54.6	82.0	86.3	5.0	30.5	7.6	1.4	0.4	0.0	0.0
24	記法	メールの内容を把握し、適切に返信を書く	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	46.2	1.8	8.0	44.2	89.6	87.8	24.7	78.7	49.7	16.7	0.2	0.7	0.0
25	記法	メールの内容を把握し、適切に返信を書く	複合条件	●	●	●	●	●	■	■	■	■	■	34.5	1.8	6.5	33.4	93.7	100.0	13.7	67.1	23.3	6.2	0.8	0.0	0.0
26																										
27																										
28																										
29																										
30																										

■学習状況の判定(学力段階)、設問別の平均正答率(%)

設問	%	基礎別/設問別					平均正答率(%)					
		1	2	3	4	5	全体	R1	R2	R3	R4	R5
25	68.0	基礎B・C					60.9	17.7	39.0	64.1	83.4	92.5
8	32.0	基礎B・A					66.3	23.1	46.0	70.5	87.4	91.3
11	44.0	1 コミュニケーションへの関心・意欲・態度					49.5	6.0	24.0	50.4	75.0	94.9
16	64.0	2 外国語理解の能力					52.7	11.9	30.5	54.8	74.9	89.3
7	28.0	3 外国語理解の能力					62.8	19.5	40.7	66.0	85.5	94.8
8	32.0	4 言語や文化についての知識・理解					67.4	27.4	54.7	70.5	83.3	86.8
5	20.0	5 聞くこと					65.6	29.3	50.7	67.1	81.5	95.6
7	28.0	A 話すこと					74.6	24.8	55.3	81.6	94.2	96.1
7	28.0	B 読むこと					59.4	10.5	30.6	63.3	89.1	93.2
7	28.0	C 書くこと					38.8	1.6	12.8	38.8	63.6	85.9
7	28.0	D 聞くこと										
7	28.0	E 書くこと										

レベル	学習状況の判定(学力段階)				
	S	A	B	C	D
説明	5	3	12.0		
基礎	A	5	20.0		
基礎	B	11	44.0		
基礎	C	5	24.0		
基礎	D	12	48.0		
基礎	E	7	28.0		
基礎	F	6	24.0		
基礎	G	16	64.0		
基礎	H	3	12.0		
基礎	I	7	28.0		



■対象教科、校種・学年、出題範囲、対応教科書

教科書	外国語
校種・学年	中学校第2学年
出題範囲	中学校第2学年
対応教科書	東京書籍



【語つながりなどに注意して正しく文を書く設問 大問2 (2) ①基礎B 26.7%】

次の対話文の意味が通るように、( ) 内の語をすべて並びかえる。  
 A: ( this / pictures / take / in / don't ) room.  
 B: OK. Ms. Green.

■ 分析

「書くこと」の領域の設問である。全体の通過率は、設問レベルが基礎Bにもかかわらず、26.7%である。全設問で最低通過率の一つである。それ以外の設問のR5の通過率は全て86.3%以上であることからすれば、この設問のみR5の通過率が61.9%であることは、顕著な低さと言える。他の段階別通過率はR4=51.5%、R3=23.6%、R2=4.8%、R1=0.6%である。無答率は4.1%であった。

■ 考察

この設問の正答は、Don't take pictures in this room. である。主な誤答は、Don't take this pictures in room. である。おおそは全体の意味するところをつかめているが、英文としてのリズムの違和感に気付いていないためにin roomを許し、最終的に文法知識で確認しなかったため正答を導けなかったと考えられる。

数えられる名詞の前には、冠詞、不定冠詞、代名詞が必要であることや名詞・代名詞の複数形の知識は単独であるものの、現実の言語使用の機会が十分でなかったために、Don't take this pictures と先に文を固定し、残りの選択肢を組み合わせてしまった結果、正しく文を書くという目的までたどり着けなかったものと推察される。

■ 学びの構造転換に向けて

- (1) ビギナーが状況を読み取って正しく応答していく過程では、まず、音声的感覚が重要な要素となる。特に提示された語の並びを正す課題 (word order) の場合、小学校から中学校への接続の過程の中で、いかに音声優先の配慮がなされたか、また中学校における学びの中で、いかに音声がそのかにされることになかったか、換言すれば、ピッチ、リズム、ストレス、テンポ等、英語の「音声の文法」と呼ばれるProsodyの力が物を言う結果となる。
- (2) これまでの一般的な授業構成を見ると、新教材の導入 (進出単語・新文型・本文の理解) ⇒練習⇒定着の一連の流れで展開している。しかし、それが即コミュニケーション能力に直結できているかというと、大いに疑問である。Only Englishの真の意味は、教室を日常のリアルなコミュニケーションの場と捉え、生徒自身が学びながら使うことや、その状況に必要なと思う材料を探しながら慣れ親しみ、最終的に安定的な自己表現の礎をつくることであると考える。

【話を聞き、特定の条件下における質問に答える 大問2 (3) ②基礎B 50.3%】

次の対話文の意味が通るように、( ) に適する1文を書きなさい。  
 A: How are you today?  
 B: ( )  
 A: What's wrong?  
 B: I have a toothache.

■ 分析

「話すこと」の領域の設問である。全体の通過率は、50.3%であり、段階別ごとの通過率は、R5からそれぞれ89.2%、85.5%、55.9%、11.4%、1.2%である。無答率は24.7%であり、設問レベル基礎の中では1番高く、全体を通して2番目に高い。

■ 考察

How are you? は、小学校英語から日常化されている最も身近な表現の1つである。また、中学校では、'Daily Scene' における対話テーマの一つに体調についてのやり取りが設定されている。しかし、R5の通過率は90%を下回り、全設問を通して無答率が高い設問の一つであった。理由の一つに、How are you? に続く会話の条件設定が原因だと考えられる。How are you? に対する返答に対して更に質問を投げかけ会話を続けていくような場面は、日常そのものであるにもかかわらず、対応できていない。その理由は、実際には最も基本的な人間関係の始まりとなる挨拶が日常となっていないこと、日常ではあっても異言語を自分の気持ちを表現する道具としての意識が伴っていないことに、課題のある領域の書くことが加わったからと考えられる。

■ 学びの構造転換に向けて

- (1) 話すこと書くことはどちらもプロダクション段階の活動であることから、本人自身の感情や意思と目的意識が必要である。日常の挨拶であっても、集団のルーティーンとしてするか、相手に対する関心や配慮として伝えたい思いを込めてするかでは、人間関係を左右する。日本語であれ外国語であれ、音声や表現形式は違っても、人の気持ちや考えを伝える手段であり、世界に関わる可能性を広げる有効なツールであることに着目して、学ぶことの意味を深めたい。
- (2) 「中学校の先生と学びの構造転換の話をすると、中学校は受験があるからうまくいかないという返事がよく返ってくる」と聞くことが多い。長らく日本の英語教育界を支えてきた旧パラダイムはそれなりの役割は果たしてきたが、今や外国語教育は、受験だけに間に合うような卑小なものではない。受験は受験として必要であり、人生の一関門の無事な通過に配慮すべきである。しかし、一人一人の長い大切な人生を無限に包括する人間教育の一端を担う外国語教育は、社会や世界、他者との関わりをもちながら自らよりよく生きる力を育む役割を負っている。



【聞いたことをなどについて問答する設問 大問2 (2) -1 基礎B 28.6%】

対話文の意味が通るように、空欄に適する文や語句を書く。  
 A: What will you do when someone wants to know the way to the library?  
 B: I'll show them the way.  
 A: You're kind. If you are too busy, what will you do then?  
 B: I'll say, " [ ] ”

■ 分析

「話すこと」の領域の設問である。設問レベルは基礎Bであり、基礎B・Cの平均正答率が58.5%なのに対し、本設問の全体の通過率は28.6%と平均の半分を下回り、基礎問題の中で最も低い数字となっている。段階毎の通過率は、R5=75.3%、R4=68.2%、R3=24.3%、R2=6.4%、R1=1.1%である。記述式の設問ということもあり、同型式の問2 (2) の無答率37.6%に次いで、37.2%と全体の中で無答率が2番目に高い。

■ 考察

この設問は、対話文の内容を読み、特定の条件・状況下における質問に答えるというものである。誤答を見ると、正解だがスペルや文法に誤りがあるタイプの誤答率は低く、無解答、あるいは誤答を合わせた割合が7割近くある。そもそも、対話文の内容自体を理解できていない生徒が多いことが考えられる。また、意識・実態調査の質問において、聞いたり読んだりしたことについて、意見を述べたり、返事をしたりするといった類の質問の肯定率が7割を下回る。与えられた状況を理解し、実際にどのような表現をしたらよいか、状況に適切な言語材料を活用できていないということが考えられる。

■ 学びの構造転換に向けて

学習指導要領が示す目標の実現を目指すためには、四技能五領域ごとに「英語を使って何ができるか」を明確にする Can-do List を学校ごとに作成・使用することで、具体的な学習到達目標を明示することが必要である。これによって、学習者自身が自ら資質・能力の達成状況を認識することで、自分の学習の方法や計画、目標などの見直しをもったり軌道修正をしたりしながら、問題解決や探究のプロセスの中でより確かな資質・能力を確かなものにすることができると期待される。教師は、支援者・共同探究者として、生徒一人一人の状況を把握し各自の求めに応じた支援をすするとともに、教師の都合だけで一方的な指導や評価をしたり、学年や教師毎にバラバラな指示を出して混乱させたりすることを避けることができる。

【あらすじ・大切な部分を正確に読み取る設問 大問5 (4) 活用A 25.4. %】

海外へ留学した日本の高校生と、海外から日本に留学してきた高校生に関する5人の生徒の意見をグラフなどの資料を使って正確に読み取る大問中、本設問は5人の意見を読み、ほぼ共通の意見をもつ3人を挙げ、次に、その3人の「ほぼ共通の内容」を英語1文で書き答える。

■ 分析

「読むこと」の領域の設問である。設問レベルは活用Aであり、昨年度と比較すると、約4%上昇しているが、同大問5の同じレベルと比較すると、(3) (a) が66.3%、(3) (b) が52.8%なのに対し、本設問の通過率は25.4%である。また、段階ごとの通過率は、R5=88.3%、R4=61.1%、R3=19.8%、R2=4.2%、R1=1.1%である。同じ「読むこと」の領域で活用Aの設問は全部で5問あるが、本設問の無答率は21.4%と2番目に高い。

■ 考察

この設問は、複数の人物の意見を比較し、共通しているものを正確に読み取る設問である。誤答を見てみると、無答が18.9%、「名前も英文も両方間違っている」が18.9%、「名前があっているが、英文が間違っている」が11.0%となっており、「ほぼ共通の内容」を英語1文で書くという問が出来ていない割合が多い。要因として、それぞれの話者がどんな内容を伝えようとしているのか、大まかな内容を把握することができていないということと、その概要の中から共通項を探し出し、1文で表現するという複数の手順を通過することが難しかったと考えられる。

■ 学びの構造転換に向けて

かなりの量の長文を読み、複数の人物の異なる意見を読み取ることや、物語の複雑な展開を追ったりすることは、前述した Skimming や Scanning のスキルだけでなく、言語能力育成に関わる、より基本的学びを意識する必要がある。日常の学習を見ても、かなりの時間が記憶すること、理解することとそれらの知識を使った活動に割かれていることが多い。時にそれが必要であるにしても、ここまでの活動は、学習者の主体的な思考や表現をほとんど必要としない。必要なことは、目的や場面、状況に応じて、相応しい語彙や表現を自分で選んで使えることであり、丸暗記や仕込みでは無意味である。学習者が先に求めるものは、素材を自らの思いや考えを生かして分析したり、価値付けたり、それらを友達と交換・共有したりして、読みを深める手法 Think-Pair-Share 法や Critical Thinking などを駆使した主体的な活動である。さらに、最終的には、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて論理的に説明したり説得したりできる自立した人間教育を目指す必要がある。

## 4 総括：外国語教育における学びの構造転換に向けて

外国語の調査結果では、第3学年の「言語や文化についての知識・理解」において、R1から5全ての段階で平均正答率が第2学年時を上回った。成果の一方、「外国語表現の能力」における「書くこと」については、喫緊の改善が必至である。

第2・3学年に共通するのは、「正しく伝わるようつながりのある文章を書くこと」に関する活用を趣旨とした設問の通過率の低さである。また、「外国語理解の能力」における「聞くこと」のうち「話の内容を聞き（読み）、特定の条件・状況下における質問に答える」設問では、基礎にもかかわらず、第3学年の通過率が30%前後にとどまった。

上記設問の考察からも明白なおおり、外国語の学習において全ての領域で必要になるのが四技能五領域を統合した言語活動の充実である。学習場面に置換すると、必然的な意味や目的、場面に応じたリアルコミュニケーションそのもの、又はそれに極めて近い活動の設定である。幼児教育から義務教育9年間を通じた目標・内容の系統性と学習・指導方法の連続性、ALTやJTEをはじめ多様な他者との協働を中核に据えることは言うまでもない。

こうした事情を加味し、生徒の実態や興味・関心等を十分に踏まえる時、一人一人に異なる多様な学習者の視点に立った学びの構造転換に帰結する。省みると、外国語教育においても公の要請として学ぶべきことと教師や保護者等が学ばせたいことに比重が置かれ、学習者自身が学びたいことがなござりとなってきた事実がある。単元を通じ、あるいは学習の一場面において学習者自身が個別に選ぶことを起点として学びを始める時、自己決定性が高まることで探究意欲が内発する。例えば、他教科で学んだ世界で起こった歴史上の出来事を英語の劇で表現する活動を設定する。いわゆるプロジェクト型の学び、学習者は劇の成功に向けて課題を選択し、必要なことを必要な時に、必要な相手との協働の中で探究する。脚本の作成は既習の表現を駆使し、いかに伝えるとより効果的かを考えながら、時に新しい用語を習得して表現に生かす。その一方では劇に挿入する音楽や写真などを入手するために、国を超えて現地の方々とのやり取りが必要になることもある。そこでのコミュニケーションは当然英語が基盤となる。ある一定の緊張感を伴うこのやり取りは、学習者が直面する必然性からくるものである。探究が進む中で外国語やその背景にある文化に対する理解を深める。また、外国語を通じて社会や世界、他者と関わり、気持ちや考え、情報を的確に理解し、伝え合う。そうして練り上げた作品を様々な対象に向けて発表する。学習者はこのような一連の探究過程を通じて、結果として四技能五領域を統合した力、ひいては外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を自然と体得する。

上述は、平成26年に発刊した『すぎなみ9年カリキュラム（外国語教育編）』来主張してきた個別、協働、探究を要する例である。学習者自身が選んだ種々の課題や方法を通して、単元や時ごとに設定された資質・能力に応じる適切な条件下で学習することは、世界で活躍するグローバル人材の育成にとどまらず、全ての子どもに、言語や文化の違いを超える相互承認の感度を育むことにもなる。こうした学びの構造転換の推進は、学習者自身が学びたいことに焦点を当て、その結果学ぶべきことと学ばせたいことを含めた三つの輪が重複し、融合する部分が広がることで学習者に実りある学びをもたらす。いずれの活動においても学習者主体を前提とし、学習者と共によりよい学びと成長を探究する共同探究者としての教師の在り方が不可欠である。